

2013 年度ドクター研究員研究活動実績報告書

ふり 氏	がな 名	なか 中	むら 村	めぐみ 恵
(研究テーマ名) アイヒェンドルフ (1788～1857) の作品における宗教観の変遷				
(研究活動実績)				
<p>カトリック信仰をもちつつ執筆活動に従事していた、アイヒェンドルフ男爵であるが、作品のなかに取りあげられる宗教モチーフをつぶさに観察すると、キリスト教信仰とアイヒェンドルフのあいだにある‘隙間’に気付かされる。初期の作品『航海』、『大理石像』などにおいては、信仰の世界と対置される異教の世界のおぞましが読者の目を惹く。日本のキリスト教作家、島崎藤村、椎名麟三、遠藤周作などの作品を概観しても、これほどまでに異教の世界が恐ろしいものとして描かれている例に筆者はまだ遭遇していない。異教の世界が恐怖として描かれる理由のひとつとして、作中に登場する十字軍遠征に見られるように、ひじょうに硬化した、ある意味幅も柔軟性もない、きわめて狭量な信仰のありかたが浮かびあがってくるように思われる。</p> <p>アイヒェンドルフ初の長編小説『予感と現在』(1815)において、主人公の青年貴族であり詩人でもあるフリードリヒが、混迷の時代に神の言葉を告知することこそ詩人の使命であると声高に叫び、時代の渦のなかで自分を見失っている人々に心を寄せつつも、激動の時代にいかに生きるべきかを窮めるために物語の最後で修道院に入っていくのも、上で述べたのと同じ理由によるものではないだろうか。すなわち、伝統的な、神のひとり子としての光輝くキリスト像に捉われるあまり、共同体の周辺に追いやられた人々とともに生きる人間イエスの姿に気付かず、そういったイエス像を受け入れることができず、だからこそ修道院に行って、そのことを確かめ、確認したかったのではないのだろうか。</p> <p>フランス革命に素材を求めた『デュランデ城』(1837)、また『のらくら者日記』(1826)においては、前者では暴力による平等は畢竟愛する人々を破滅へと導くものにほかならない様が描かれ、後者では、平等、あるいは身分差の撤廃は、暴力によるのではなく、愛によってのみ成就されることがメルヒェン風に描かれ、一見、アイヒェンドルフのもつキリスト教信仰が、フランス革命に対置されるべきひとつの重要なテーゼとして持ち上げられているように思われる。しかし、1830年～1838年に書かれた自伝的な断片「わが誕生の章」のなかに述べられているように、アイヒェンドルフは貴族階級が社会のなかでもはや指導的役割を果たしていない時代に生まれてきたことを嘆き、そのような自分を救ってくれる存在として、イエス・キリストに言及している。すべての人間に平等をもたらすイエス・キリストの愛は、遅れて生まれてきた自分をも新興勢力と等しい存在に保ってくれる。イエスの愛は彼にとっては遅れて生まれてきたことの埋め合わせでしかない。本来なら人間を、そして何よりもその人命を新たに生まれ変わらせる信仰の力もここでは認められない。</p> <p>アイヒェンドルフにとってキリスト教信仰は、崩れそうになる自我を曲がりなりにも支えてくれると思われた唯一の柱であった様子がここから読み取れよう。だからこそ、プロイセンの官吏として奉職していたとき、どの民族もその記念碑となるべき建造物をもつべきであるとの理念のもと、上司のシェーン長官に協力して、ドイツ騎士団の居城であったマリーエンブルク城の修復に</p>				

心血を注いだ。しかしながら同じマリーエンブルク城に素材を求めた歴史劇『マリーエンブルクの最後の英雄』(1830)は興行的には散々なもので、アイヒェンドルフは意気消沈する。常に定まることなく揺れている、そして崩壊寸前の自我をそのまま受け止めず、キリスト教信仰で謂わば蓋をしてしまった状態では、観客の心に届く作品は書けなかったということなのか。

1844年に56歳で年金生活に入ったが、晩年の文学活動としては、スペインのカトリック教徒の作家カルデロンの『聖劇集』の翻訳(1846)、また『ドイツの近代ロマン主義文学の歴史のために』(1846)、『キリスト教との関連における18世紀ドイツの小説』(1851)などの、カトリック教徒としての視点に立脚した文学史の執筆のみで、創作活動は一切していない。晩年に『ファウスト第二部』(1831)を著したゲーテと較べると、その差は歴然としている。瓦解寸前の自我を抱えつつ、キリスト教信仰でその自我を覆いつくすのでなければ生きていけなかったアイヒェンドルフであったればこそ、自分自身と対峙するののでなければ生み出すことはできない創作活動ではなく、自分を破滅から救ってくれていると信じていたキリスト教信仰に立脚した、翻訳劇なり文学史なりしか、もはや綴ることができなくなっていたのではなかろうか。

いずれにせよ、時代の激動のなかで自分自身を見失いそうになりながら活動を続けていた、ひとりの作家の姿が、そこに浮かびあがって来るように思われる。

《論文・研究会での発表》

今期はなし。次年度以降の課題。